イサム・ノグチ

日系アメリカ人の彫刻家イサム・ノグチ（1904～1988 年）は、文字通り広島に広がる遺産を持ちます。この街が第 2 次世界対戦後の復興に取り組んでいた初期の頃、ノグチは広島に原爆投下追悼の中心的存在である広島平和記念公園と平和大通りをつなぐ、2 つの主要な橋の手すりをデザインしました。

当時、ノグチは日本式庭園や抽象的な公共彫刻で国際的に有名でしたが、このプロジェクトは彼にとって重要なものでした。日本人作家ヨネ・ノグチ（1875～1947 年）とアメリカ人編集者でジャーナリストのレオニー・ギルモア（1873～1933 年）の息子として、野口は米国と日本の関係修復を助けることに個人的な関心を持っていました。

平和大橋および西平和大橋と名付けられたこの 2 つの橋は、純粋な実用性をはるかに超えるものです。ノグチの 2 つの作品は、東から西へと進む動きを形作ります。平和大橋の手すりの円形の末端は日の出と建築行為を連想させ、一方で西平和大橋の端にある厚い三日月形は日没と出発を思い起こさせます。1952 年に橋が建設された時、ノグチのデザインは物議を醸しました。人々は手すりに十分な高さがなく、歩行者が川へ落ちるのを防げないことを懸念したのです。現在、これらの橋は広島に過去と未来両方を象徴する存在となっています。